

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十六卷 第五號

昭和八年五月一日發行

論叢

國有鐵道の民營化 法學博士 神戸 正雄
 生産力の自己運動 文學博士 高田 保馬
 ヘーゲル史觀の實踐的構造 經濟學博士 石川 興二

時論

昭和八年度豫算より財政計畫 法學博士 小川 郷太郎

研究

獨占産業組織の社會的影響 經濟學士 大塚 一朗
 平均利潤率再論 經濟學士 柴田 敬

說苑

中心都市における工業集積 經濟學士 菊田 太郎
 英米兩國所得稅の特徴 經濟學士 佐伯 玄洞

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

説苑

中心都市における

工業集積

菊田 太郎

何故に、あらゆる工業は至る所平等に散布しないで特別の狭少な地域に集中するか。この理由を明かにする所謂「集積論」¹⁾は、工業の立地論中、最も興味と意義に富む部分である。

この集積論の問題とする所は、嘗て論じたやうに、抽象的には解き得ないものであつて、集積する工業、及び集積地の性質に關する具體的な觀察を、基礎とせねばならぬ²⁾。所で、複雑極まりなき各種工業の性質は暫く措き、實際の工業集積地を見るに、その顯著なタイプとして、單なる工業地域と中心都市(その郊外をも

含む)とを分つことが出来る。そして、先づ、單なる工業地域における集積(ウェーバーの云ふ偶然集積³⁾)は、概して單純な立地因子を基礎とし、立地因子と工業との連關も自然であるために、その説明はさまざま困難でない。これに對し中心都市における集積(即ち純集積)の原因となる立地因子は、數も多ければ、相互關係も複雑であり、その各工業に對する作用も極めて多様である。第二に、兩者の立地論中で占める地位も、相違してゐる。元來、一經濟體內のあらゆる生産立地は、相互に他を規定する⁴⁾。併し、經濟體の範圍自體をその市場圈によつて決定し、又後に述べるやうに、經濟以外の事由に影響される程度が甚だしいから、中心都市の狀況を先づ定めて置くのは、立地論を統一し、理論的たらしめる所以である。冒頭、孤立國の中央に唯一の大都市ありとするチュートネンと、個々の工業指向を問題としたウェーバーとの成果の差異は、よくこの間の消息を示してゐる。この兩見地を主な理由として、本稿では、中心都市の工業集積を問題とする。

1) Alfred Weber; Über den Standort der Industrien, I. Teil, Reine Theorie des Standorts, S. 35, 121 ff.
 2) 拙稿; アルフレッド・ウェーバーの工業集積理論について(經濟論叢、第三十四卷、七五七頁)
 3) Alfred Weber, a. a. O. S. 131 ff.
 4) 拙稿; 生産立地理論について(經濟論叢、第二十八卷、九一〇頁)

かゝる問題の提出に對しては、中心都市の工業集積は、その人口集中とともに、工業の都市集中問題として夙に論ぜられてゐると、批評することが出来やう。事實それに相違ない。併し、問題を充分明かにしてゐるとは云ひ得ない。蓋し、第一に従來の研究は、基礎とするに足るだけの立地理論を有しない憾がある。立地理論は、先づ、一般に、一立地單位を構成する各經營の立地は、これに對してそれ／＼の地點が他の地點に超えて供する利益、即ち立地因子の作用で定まると見る。次に、立地因子の結合狀況について、一定のタイプを考へてゐる。従つて、中心都市の工業集積についても、このタイプに屬する立地に並存する多數立地因子の種類、強度を確め、その各立地單位に及ぼす総合的な作用を決定し、これによつて問題に答へねばならぬ。然るに、立地理論自體がよく發達して居らず、又これに對する一般の理解も充分でないために、従來工業の大都市集中が屢々論ぜられたに拘らず、その立地因子が明瞭にされて居らず、特に立地因子相互間の

關係の如き、殆んど無視されてゐるのである。

第二に、前項ともある程度まで關聯してゐるが、中心都市の工業集積を、工業分布上における都鄙の對立と云ふ一般問題中に包括することは、その特質を明かにする所以でない。蓋し、一般の工業都市は、經濟體の單なる要素に過ぎず、又その立地因子は工業との有機的な連關を明示するから、比較的容易に捕捉し得る。これに反し、中心都市は國民經濟の中樞とも稱すべき位置を占め、その發展が工業に負ふ所も固より少くないけれども、根本的でなく、その大をなす基礎となつた機能は、經濟的には、商業・金融・貯藏等流通の中心たることである。更に、經濟以外、政治・軍事・文教の中心たることも、普通の工業都市とは著しく異なる色彩を與える。かやうな特色に應じ、中心都市の工業立地因子の種類・組成、従つてまた工業集積は、一般工業都市のそれとは、當然に、相違せざるを得ないからである。

この見地を基礎とするから、以下においては、先づ、

中心都市の基本的な性質を定める。次に、この基本的な性質の結果として、如何なる立地因子が、如何なる組合せで存在するかを見る。その上で、これら因子の作用によつて集積する工業の種類・範圍を説明しやうと思ふ。

固より、これらの問題は何れも重大であり、複雑でもあるから、簡単に論斷することは不可能で、前提として、各個の中心都市に關する周到な實證的觀察を要する。併し、他面、この具體的な觀察を行ふに先つて、豫め問題の輪廓を決定して置くのも、全然無意味ではない。本稿はかゝる見地から一應の概括を行つた結果に止まり、あくまで暫定論であるから、御示教を得て他日修補したい。

二

中心都市は、現代の國民經濟と不可分のものである。従つて、その性質はこれと併せ觀察する場合、始めて明かになる。

即ち、一般に、經濟の發達は、經濟體の擴大、その

内部における地域的な分業・協業の進歩を内容とする。國民經濟の成立、中心都市の發生は、何れもこの經濟發達の長い歴史の結果である。詳言すれば、工業を營む都市、及び農産物を供する周圍狹少の地域より成り、略々自給的であつた都市經濟の時代には、政治上の首都があり、又例外的商品について相當廣い地域に亘る市場が存在するにしても、現に見るやうな中心都市は發生し得なかつた。然るに、多數の都市經濟を綜合した國民經濟の成立するや、各都市各地方がそれ／＼優れた部門の生産に専門化し、その生産物を全體に供し、又必要品を廣く他に仰ぐことゝなつた。この變化がかゝる大經濟體の中心を前提とし、又その成立、發展の原動力となることは、當然の筋道である。そして、この中心としての機能を果すのが、中心都市に外ならぬのである。従つて、位置・歴史等に應じて相違する點も少くはないけれども、國民經濟と等しく、中心都市についても典型を定める事が出來、次の如き性質を併有すると考えて、大過はない。

5) J. A. Hobson; The Evolution of Modern Capitalism, '26, p. 154. (近代資本主義史論、一七四頁) H. Ritschl, Reine u. historische Dynamik des Standortes der Erzeugungszweige (Schmollers Jahrbuch, 51. Jahrg., S. 813)

6) H. Ritschl; a. a. O. S. 865.

先づ、第一の特質は、云ふまでもなく、國民經濟の中樞たることである。詳言すれば、中心都市は、國家を範圍とする大交易體系の中心として、これを商業的に支配すると同時に、これを代表して他の中心と連絡する。その具體的な表現が、大卸賣商業の存在である。次に、商業を補助する運輸、貯藏の設備、金融機關がよく整備してゐる。⁷⁾この性質に基づく立地的に重要な事實は、製品・原料の市場であり、新工業の發生地となり、また所謂接觸の利益を興えることである。第二に、かくの如き經濟體の中心は、國民經濟と等しく、自然に發生したものでなくて、國家の促進に待つ所多く、時としては全然國權の發動に基づいてさへゐるのである。⁸⁾所が、國家のこれら都市に對する政策・施設は、經濟方面のみに局限されてはゐない。又都市自體かゝる中心に選ばれる位優秀な地歩を占め、或は中心たるがために富力・人口で勝つてゐるから、經濟以外同時に政治・軍事・文教等の中心たるを常とする。その結果は、立地的に見れば、製品の市場として重要である。

り、接觸の利益が極めて大きい事となる反面に、これら諸多の活動が狭少な地域に密集するために、地代は高からざるを得ない。

第三に、經濟の中心としての活動は、多數の人口を集積せしめ、又かく集積した人口をよく養ひ得るのである。即ち、専門熟練勞働に對する需要大きく、勞賃の高いこと、技能修得の機會に富むこと、享樂設備の具はつてゐること、これらを主な理由とする有爲な人口の集中は、近代の一大特質をなす。⁹⁾更に、高い生活費の壓迫、社會の著しい個人主義化が、勞働人口の率を高からしめる。¹⁰⁾これら諸事情が相俟つて、工業立地としての中心都市は、勞働特に熟練勞働の供給が豊富など云ふ點で、著しい特色を有する。但し、勞賃は必ずしも低廉ではない。

故に、概括して、中心都市は、工業立地として、製品・原料の市場たること、勞働特に熟練勞働に富むこと、情勢・接觸の利益の大きいことを特色とし、反面に、地代・勞賃が高いと、云ふことが出來やう。

- 7) N. S. Gras; An Introduction to Economic History (加藤氏譯; 綜合經濟史一九一頁以下)
 8) K. Bücher; Die Entstehung der Volksw., '22, S. 139.
 9) G. v. Mayr; Die Bevölkerung der Grossstädte (Die Grossstadt, S. 75 ff.)
 10) O. Schwarzschild; Die Grossstadt als Standort d. Gewerbe (Jahrb. f. Nationalö. u. St., III. F., 33. Bd., S. 738 ff.). K. Wegner; Die Arbeitsorientierung

然らば、かゝる立地條件は、工業に對して如何に作用するか。先づ、市場の利益を原料について觀察するに、その價格は常に低廉とは限らない。併し、原料の採取、生産の規模は、工業のそれに比して普通甚だ小さい。しかも、工業の使用する原料は、製品の需要並びに生産設備の關係上、品質が限定されながら、多種類が、大量に、必要に應じて直ちに供給されねばならぬ。この要求を最もよく充たすものは、即ち、各種原料の市場に外ならぬ。更に、市場の先物買入・小買によつて金融・保險・危険の負擔を避け得ることも少くはない。製品の市場が、繼續的に大量生産を行ふ工業に有利な點も、略々同様であるから、反覆は避ける。¹¹⁾ 第二に、勞働も必ずしも低廉ではないが、豊富であり、極めて高級な必要に應ずる熟練勞働者から、單純な力役に服する雜役夫まで、種類に富むから、隨時隨意の組織を整え得るのである。第三に、情勢の結果、即ち、工業の發展、集積に比例して、これを助長する組織・市場・熟練勞働者が生じ、他との競争力を強めることは、處

女地に新工業を興す際の困難に徴して、明白である。¹²⁾ 第四に、商工業を始め、各種の活動が狭少な地域に集中してゐるために、接觸の利益を受け、製品の改善、生産費の低減することも、顯著な事實であるが、餘りに個別的な事例に立入らねばならぬから、詳説は略する。

右の如き立地因子を擧げることには對しては、同様の事情が他の工業集積地域にも認め得るとの評が、生ずるかも知れない。併し、中心都市には他の決して比肩し得ない特長がある。即ち、第一は、市場で需要される製品、供給される原料、使用し得る勞働力、情勢・接觸の利益等、何れも無限に複雑な組成を有し、一般工業地域のやうに、二三の部門・部分に偏してゐない。第二には、かく多種多様の因子が、狭少な地域に同時に並存してゐる。その結果、工業集積も、他に見られない特色を帯びてゐるのである。

以上述べた立地因子の存在を否定する見解はないが中心都市が他の大都市と等しく工業集積地たることを

als Standortsfaktor (Jahrb. f. Nationalö. u. St., III. F., 78. Bd., S. 175 ff.) ;
 11) F. E. Clark; Principles of Marketing, p. 90 (緒方氏譯; 賣買組織論、上、一八頁以下)
 12) 拙稿; 纖維工業と勞働(經濟論叢、第三十三卷、六二六頁以下)

妨げる消極的な理由として、高い地代を擧げた例は、極めて多い。併し、この見解には従ひ得ないと思ふ。勿論、高い地代は、家賃その他の生活費を介して賃賃を高め、間接には不利益になるけれども、直接には工業の郊外移轉を促すに止まる¹³⁾。そして、この郊外に移轉した工業も依然中心都市の工業たるに變りはない。何故と云ふに、大都市の工業が郊外に移轉して、中央は商業地たる〇ゴとなり、或は更に進んで、中心都市は商業のみを機能とし、周圍に工業の盛な所謂衛星都市を見るとしても、これは一地域内の地区的分業が擴大し、一層顯著となつたに過ぎないからである¹⁴⁾。

要するに、工業立地としての中心都市の特質は、各種製品・原料の市場たること、各種労働特に熟練労働の豊富なこと、情勢・接觸の利に富むこと、特に、これら立地因子が多岐に亘り、且つ密集してゐることを主とする。

三

前項に述べたやうな立地因子が作用する結果、中心

中心都市における工業集積

都市には如何なる工業が集積してゐるか。叙述を個々の具體的な實例から始めたい。

製品の大市場にあり、又販賣組織との密接な連絡を基礎とするために、國民經濟上殆んど獨占の地位を占めてゐるのは、倫敦・紐育・伯林、別して我が東京市における書籍・雜誌の印刷・製本である。これは、資本或は交通上の便益ではさまで勝つてゐないけれども、首都が國民の精神生活上の中心として書籍・雜誌の最大市場であり、又販賣組織との關係が致命的な影響を與えるために外ならず、この部門は商業地區自體に行はれる特殊性すら示してゐる¹⁵⁾。

中心都市が原料の大市場であるために、こゝを立地とするものに、倫敦のゴム工業¹⁶⁾、紐育の砂糖・銅の精製がある¹⁷⁾。前者は、海峽植民地その他のゴムが集まり、特別の取引市場があり、取扱商人が多數集中してゐるためであり、後者も、粗糖・粗銅の大集散地たることに基づく。

豊富な労働、特に熟練労働による典型的な産業は、

第三十六卷 八八三 第五號 一四三

13) 黒正博士；經濟史論考、一九五頁以下

14) O. Schwarzschild; a. a. O. S. 734 ff.

15) O. Schwarzschild; a. a. O. S. 753 ff. 日本地理大系；大東京編、二四八頁

16) A. Wilmore; Industrial Britain, p. 206.

17) R. H. Whitbeck; Industrial Geography, p. 237.

伯林の高級既製服、及び装身具製造である。この部門が、家事を處理する自由を失はないで家計を補はんとする婦人が、家内工業として行ふものであることは、他地方と等しいけれども、勞働の質が斷然優れてゐる。蓋し、環境及び生活の關係から、伯林の婦人は手先が器用敏捷な許りでなく、全體として趣味に秀でゝゐる。従つて、補助的な勞働とは云へ、他地方よりも勞賃は高いけれども、質及び速度で勝つてゐることは、この不利を償つて餘りあるのである。¹⁸⁾又各種勞働を併用せねばならぬ電氣機械工業も、大抵中心都市の獨占である。¹⁹⁾

情勢の力、及び、接觸の利益は、奢侈品工業と官營工業とに最も明瞭に現はれてゐる。奢侈品即ち高級被服・貴金屬製品等の製造は、支配階級の需要を充たすため、中心都市に早く成立し、後その使用が全國に擴大しても、當初に確立した名聲と、よく流行を捕捉し得る便宜とにより、長く他を壓する。我が化粧品製造が東京・大阪兩市に殆んど獨占されてゐるのは、この顯著な實

例である。政府・軍隊の需要充足、或は新工業の移植を目的とする官營工業の立地が中心都市を主とし、又これに關連して各種の補助工業が榮えるのも、當然の成行に屬する。東京市の工業が、千住製絨所、日本皮革、日本製靴の各工場、砲兵工廠、印刷局、赤羽工作所、深川セメント製造所、品川硝子製造所（或はその後身）を除けば、如何に寂しいか、大阪の工業に造幣局が如何に大なる貢獻をなしたか。²¹⁾共に周知の事實であらう。

併し、中心都市に工業の集積する理由として有力なのは、前にも述べたやうに、これら個々の立地因子ではなくて、これらが同時に並存することである。この點に注意すれば、上記の例にあつても、一因子の力によるものゝ稀な事實が認められやう。衣服業では需要の集中、印刷業では熟練職工の存在、電氣機械工業では接觸の利益が重要な支柱であることは、無視し得べくもなく、唯各因子間に幾らか本末・輕重を區別し得るに止まる。進んで伯林・東京・大阪の麥酒釀造業に至つ

18) O. Schwarzschild; a. a. O. S. 734 ff.

19) H. Schumacher; Die Wanderungen d. Grossindustrie in Deutschl. u. Vereinigten Staaten (Weltw. Studien., S. 409)

20) 中山氏; 化粧品石輪製造工業の概況 (日本工業大觀、普及版、六〇五頁)

21) 黒正博士; 明治初年の大阪の新工業 (經濟論叢、第二十八卷、六〇頁)。本庄博士、大阪の文化と造幣局 (同、第二十七卷、五八七頁以下)

ては、その基礎が市場にあるか、精神・技術共に優秀な労働者であるか、或は確立された名聲であるか、斷定に苦まざるを得ない。

かやうに個々の觀察を重ねて來ると、これら僅少の實例に徴しても、既に、中心都市の工業集積の特色がある程度まで明瞭になる。今その主要な點を列擧すれば、次の如くにならう。

先づ、工業の極めて多岐に亘り、各種の製品を供する事實が注意を惹く。従つて、無秩序な一向取止めのない集積と思はれるのも無理ではないが、併し、仔細に見ると、雜然たるものではない。中心都市が多種多様の立地因子を具えてゐる結果、當然に、工業の種類が豊富なのである。複雑な集積自體は、正に、一貫した立地法則の存在を示すものと云はねばならぬ。

次に、かやうに集積が複雑でありながら、あらゆる工業に亘らず、略々一定の範圍に限られてゐる事實が、認められる。即ち、第一に、大企業に屬せず、大經營の工場でないものが多い。²²⁾ 蓋し、これらは假令原料市

中心都市における工業集積

場と隔つても、市場に出張所を設けなどしてよく市況に通じ、長期先物契約等によつて大規模の買付を行ひ、低廉な賃率を利用し、保管の設備を整へ、危険の負擔を辭せず、時には供給源泉の統一すら行ひ得る。販賣に關しても、略々同様である。又労働についても、機械による所多く、接觸・情勢の利益も、自らよく創設し得るのである。これに反し、獨立小規模の小工業は資本力に乏しく、他に依頼する事が多いから、市場・勞働力その他諸種の環境の有利な中心都市を、離れることが困難である。

この關係に基づき、家内工業が中心都市に最も盛である。蓋し、この生産要具を要すること少なく、流行・景氣に應じて事業を伸縮せねばならぬ經營型態は、原料・製品の賣買その他企業的な方面を擔當する問屋、及び各自の家庭で作業する労働者を要し、又補助業に俟つ所が多いが、これら要件は中心都市に最もよく備はつてゐるからである。²³⁾

第二に、製品の種類から見ると、精製品・高級品の

第三十六卷 八八五 第五號 一四五

22) 黒正博士；經濟史論考、一九七頁
23) K. Wegner, a. a. O. S. 205 ff.

製造、輕工業が多く、半製品、下級品の製造、重工業は少ない。蓋し、この區別は、先づ、ある程度まで企業經營の大小と關連してゐる。更に、前者においては、中心都市の原料の高價なことが苦痛とならず、機械力よりも勞働就中熟練勞働が重要であり、又社會的な協力に俟つ所が大きいに對し、後者については、低廉な原料・勞力による他地方が、競争上寧ろ有利なからである。實際、中心都市に、製鐵業と離れて機械・器具製造が行はれ、製紙業なくして印刷業・製本業が榮え製材業なくして家具製造業があり、東京・名古屋間に時計製造について分業關係の明かなのは、この理由による。²⁴⁾

要するに、中心都市に集積する工業は、多岐に亘るとはいへ、精製品、高級品の製造、輕工業等大體小規模のものを主とし、大工業は比較的少ないと見てよ

四

以上、粗雑ながら中心都市における工業立地因子、

特にその結合状態と、その作用によつて集積する工業とを鳥瞰した。

その結果に徴すると、中心都市に集積する工業は、極めて多種類に亘り、多數ではあるが、總べてとなく略々一定の範圍に限られてゐることは、明瞭である。次に、現代の工業發展の大勢は、大規模化・機械化・無機化の方向を採つてゐるが、この傾向が中心都市の工業集積を甚しからしめないことも、前項に述べた所に照し、大體推知し得る。更に、中心都市自體についても、工業特に大工業の郊外移轉の趨勢が、かなり顯著である。従つて、將來愈々工業が中央に集中し、従來以上の混亂・弊害を生ずるとは、考えられない。これが實際的な結論である。

勿論、序言にも斷つた通り、問題を徹底的に究めた結果ではなく、單に暫定的な結論たるに過ぎない。何故と云ふに、二方向の觀察によつて、補訂を要するからである。即ち、先づ、個々の中心都市は、位置・歴史その他の特殊性により、殊に屬する國民經濟の特色に

24) K. Wegner; a. a. O. S. 175 參照。篠原氏；時計製造業の近況（日本工業大觀、普及版、三四八頁以下）

よつて相違してゐるから、これについて具體的な検討を行はねばならぬ。併し、それよりも一層重要なのは、他の工業集積地域との比較對照である。蓋し、生産の立地は相互に他を規定するから、一立地を單獨に取扱つては眞相に達し得ない。中心都市における工業集積も、石炭産地、過剩勞力或は特殊な勞力の存在する地域等、他の工業集積地と比較し、統一的に見るとき、始めて、國民經濟中に占める獨自の地位と、眞の重要性とを認め得るであらう。